

バタイユ・オブセッション

—— ジョルジュ・バタイユと鼠男における視覚の転覆 ——

片 岡 一 竹

序

ジョルジュ・バタイユの著作を精神分析的観点に基づいて読解するという途を進むにあたって、この仕事がつつ不可能とも形容されうる困難さに対し、私たちはどこまでも自覚的であらねばならない。この自覚はそれに相応する慎重さを要求するが、しかしいかなる慎重さだろうか。私たちはすでにこの問いを別の場所で扱った⁽¹⁾。その結論をここで改めて素描するのは無用なことではないだろう。

初期のテキストにおいてフロイトへ少なからぬ好意を示し、また自身も分析経験をもつこの作家は、しかしある時期を境として、精神分析に対する批判的論調を強めていく。批判の根拠は以下の通りである。性的要素をもった具体的事実に関して、精神医学や精神分析は教条化した抽象的理論に基づき、それを外在的に言説化^{ディスクール}するがゆえに、性的要素のエロティシズムとしての側面、つまり性的なものが可能にする「内的経験 *expérience intérieure*」を語りえない。性的なものが本来有する異質性 (*hétérogénéité*) は理論の同質性 (*homogénéité*) の中に還元され、事実と理論は互いにとって疎遠なままに留まる——そこには、エロティシズムを内的に経験する主体とそれを外的に観察・分析する主体との間に、いかなる交流^{コミュニケーション}の可能性もないのである。

バタイユによるこの精神分析 (精神医学) 批判を、本稿もまた真面目に受け止めなければならない。たとえバタイユが松毬の目玉に代表されるような「強迫 [*obsession*]」(OC2: 14/194) に取り憑かれていることをしばしば明言するとはいえ、例えば彼に強迫神経症のレッテルを張って「診断」を行うような分析の姿勢は、初めに作家自身によって斥けられた通り、教条的な理論の同質性への還元によってバタイユや彼の内的経験が本来有する異質性を無化する所作に他ならない。それは畢竟するに、自らの医学的知識を動員し、作家を患者と見做して数々の診断名を付すことでバタイユの仕事を真面目に評価しようとし^レない医師ブルトンの振る舞い (Breton [1929: 16-17/169-172]) と変わらないだろう⁽²⁾。

(1) 片岡一竹「バタイユ・サンボリック——バタイユと精神分析とシニフィアンとしての太陽肛門」、藤本一勇・横田祐美子編『蘇るバタイユ——バタイユと哲学 (仮題)』、東京：白水社、近刊。

したがって私たちは、具体的事実が有する物質性、いみじくもバタイユが『ドキュマン』期(1929-1931年)のある文章で定義したような意味での「物質性」に拘泥しなければならない。それは彼がフロイトからその表象を借り受けるべきだと主張した、観念論の抽象性に殺害されない物質の具体性である(OC1: 180/58)。バタイユはフロイトにおける「物質の表象」が具体的に何かを明言してはいないが——そしてこのことはブルトンによる批判の対象にもなっているが(Breton [1929: 16/169])——私たちは実際にそれをフロイトの中から探し出そう。そのためには、教条化の運命を辿った分析理論よりも、理論に^{マテリアリティ}素材を与える——そしてそれが物質である以上、観念論化した理論の抽象性を逸脱せずにはおれない——臨床的事実に訴える方がよいだろう。

バタイユを鼠男と、この精神分析史を代表する強迫神経症者と出会わせるという本稿の試みは、上述の理由に基づいている。実際、彼ら二人の間には外面的にも様々な共通性が見出せる——例えば肛門的なものへの執着、サドマゾヒズムの前景化、刑苦(刑罰)への固執、高潔なものと下劣なものとの通底など、その例は枚挙に暇がない。しかし本稿において私たちは特に、両者における「視覚的なもの」の問題を取り扱う。バタイユと鼠男は、両者ともある特殊な視覚の場面をその著作や空想の中で形成しており、そこにおいては能動的な視覚の転覆が主要な役割を演じている。そしてこの転覆の不可避性に対する主体的な応答の差異に応じて、両者はある対照的な道を歩むこととなる。

本稿の目的は、この対照性を明らかにすることを通じて、バタイユという作家の、また鼠男という強迫者の固有なものを示すことにある。それは、自身のうちにありながら自身には制圧不可能な無意識的奔流に対する主体的応答のみが示しうる固有性である。

1. 鼠男の性愛化された視覚と鼠刑の光景

1-1. 鼠男における視覚の性愛化

バタイユにとってある種の視覚的なものが中心的な主題であるということは、彼の最初の小説が『目玉の話』(1928年)と題されていること、また太陽を直視しながら酷烈な陽光によって焼き焦がされる松毬の目玉の空想に彼が取り憑かれていたことなどから、疑念の余地がない。それに対して、鼠男における視覚的なものはこれまで充分な研究の対象になってこなかったように思われる。

しかし患者にとって〈見ること〉がその病理の主要な位置を占めることは、治療開始の時点から明らかである。1907年10月2日に行われたフロイトとの最初の面接^{セアンス}(予備面接の翌日に行われ

(2) Hollier [1974: 205/202] はブルトンの「シュルレアリスム第二宣言」におけるバタイユへの攻撃の文脈で用いられた医学的診断を問題にし、サルトルのバタイユ批判の文章「新しい神秘家」でも同じような結論が導かれていることを指摘している。彼はまた、バタイユが精神分析の患者であったのに対し、ブルトンがフロイトの精神分析に影響を受けた医師であったという非対称性に注意を促している(Hollier [1974: 203/201])。

た2回目の面会⁽³⁾のほぼ冒頭から、彼は「女性の身体を見ることへの激しく悩ましい好奇心」(GW7: 386)を語る。鼠男曰く、この好奇心は、彼が4、5歳の頃、住み込みの家庭教師(子守を兼ねる)の女性のスカートの中に潜り込んでその性器と身体に触れた経験をきっかけに生まれた。6歳の頃、彼が病気の始まりと見做す願望が強迫的な恐れを伴って生じる。それは、フロイトの再定式化によれば、「女性の裸を見たいという願望を私が抱くと、父親が死ぬに違いない」(GW7: 389)という観念として表される願望である。このことからフロイトは幼年時代の患者を「窃視欲〔視覚快 Schaulust〕という性的な欲動成分の支配下に置かれている子供」(GW7: 388)と形容している。

この観念の病理的性格は、裸の女性を見たいと考えることそのものが現実的效果(父の死)をもたらすと信じることに存する。そこでは自身の心的現実において表象の水準で生じる事柄が物質的現実¹に直接作用するという「彼の思考や感情、また良い願望や悪い願望がもつ万能性」(GW7: 450)、いわゆる「思考の万能」が機能している。鼠男が語ったこの概念が後にフロイトによって我有化され、『トーテムとタブー』(1913年)における原始部族の信仰の分析の要となったことは周知の通りである。ここですでにしてその原型が完成している「思考の万能」、およびその裏面といえる「思考の犯罪」(Laplanche [1980: 274])——つまり、思考が万能であるがゆえに、悪を考えることが悪を為すこと同然に罪と見做される——は、患者のその後の人生に繰り返し憑きまとうこととなる。

しかしこうした鼠男の思考の万能を巡ってしばしば見逃されるのは、犯罪と見做される願望が女性の裸を「見る」ことに関わるという事実である。興味深いことに、鼠男がこうした願望を抱くきっかけとなったのは、家庭教師のスカートの中で彼女の性器と身体に「触れる」という経験であった。しかし彼が抱くのは裸の女性に「触れる」ことの願望ではなく、それを「見る」ことの願望である。患者はここで「触れる」ことを「見る」ことに変換してしまう。触覚から視覚へのこうした変換は鼠男に特徴的であり、彼は性的対象に直接触れずともそれを眺めるだけで満足すると語る。これをもとにフロイトは「覚書」の中で「彼にとって、見ることは触ることの代用になっているのだ」(GWNb: 563)と指摘している。

このように鼠男にとっては視覚それ自体が性変化²されている。それは、フロイトが強迫神経症者一般について「見たいという性的欲動」と「知りたいという性的欲動」が主要な抑圧の対象と

(3) 鼠男ことエルンスト・ランツァー(Ernst Lanzer)の分析は、1909年の論文「強迫神経症の一例についての見解」の中で報告され、そこでフロイトは症例呈示に続いて強迫神経症の理論化を試みている。これとは別にフロイトが各面接当日の夜に書いた未刊の覚書が発見されており、これによって私たちは論文では削除された要素や患者および周辺人物の本名、セッションの日付などを知ることができる。この覚書は現在ではフィッシャー社の『フロイト全集』の別巻に収録されている。本稿では公式に発表された論文を主として参照するが、適宜覚書に基づいて情報を補った(ただし『全集』ですべて仮名となっている人物名は本名に置き換えた)。

なると語りながら、「思考過程それ自体が性的になる」(GW7: 460)と論じているのと同じ事態である。鼠男が父親の死後、あたかも父親の亡霊に見せつけるかのように、わざわざ幽霊の出るとされる時間帯に、鏡の前で勃起した陰茎を露出するという「鏡像的自慰」と呼べるような奇妙な行動に勤しんでいたこと (GW7: 425-426) も、この視覚の性愛化によって説明できる。彼は通常の自慰のように自分の性器に触れずとも、それを見る (あるいは見せる) だけで、自慰がもたらす快を得ることができるのである。

1-2. 鼠刑における視覚的なものの役割

このように性愛化された視覚的なものは、エルンスト・ランツァーという患者に鼠男の異名が与えられる当のきっかけとなった、あの鼠刑の場面 (GW7: 390-392) の中でも主要な役割を演じている。

鼠刑について確認しておこう。それは鼠男が兵役に就いている頃、ガリツィアという地での軍事演習の最中にネメチェックという大尉が彼に語って聞かせた「東方での身の毛もよだつ刑罰」(GW7: 391) に基づいている。フロイトは論文でも覚書でも単に「東方 Orient」としか記していないが、これは当時ベストセラーとなっていた仏作家オクターブ・ミルボー (Octave Mirbeau) の小説『刑罰の園』(1899年) の中で記述されている中国の刑罰に基づくと推察されている (Shengold [1971: 277/64])。鼠男が語る刑罰の内容は以下のようなものである。刑罰の犠牲者は縛られ、複数の鼠が入った甕^{ラット}を尻に被せられる。甕の中の鼠たちは出口を求めて、犠牲者の肛門の中に食い入っていく。自由連想がこの刑罰の話に及ぶや否や、鼠男は寝椅子から立ち上がり、その細部を話すことに抵抗した。彼はフロイトによって文言を補われながらようやく刑罰の内容を説明し、ネメチェック大尉からこの話を聞いた時、この刑罰が自分の「大事な人」(GW7: 392) に——つまり自分の父親と、恋人である〈婦人〉こと従妹ギーゼラに——行われるのではないかという「表象」(*ibid.*) が浮かんできたことを打ち明けた。

鼠男は「表象 (Vorstellung)」というニュートラルな、つまり思考の主体的我有化を欠いた (Laplanche [1980: 274-275]) 表現を用いているが、フロイトが指摘しているように、それは観念にまつわる願望や恐れを検閲によって隠蔽するための方策であり (GW7: 392n.)、彼がそれを語る表情には「自分でも分からずに抱いている快に対する戦慄」(GW7: 392) が表れていた。

この「表象」に隠された、患者自身にとって未知の快はどのようなものだろうか。この快が単にエロティックなものではなく、攻撃性というタナティックな要素をも含むことは容易に観察できる。それでは、この快はサディズム的なものであろうか。それともマゾヒズム的と形容できるだろうか。ここには容易に解決できない問題が潜んでいる。

患者がしばしば示す肛門性愛への固着——例えば、「覚書」に記された、自分の肛門から垂れ下がった便でフロイトの娘 (鼠男の妹オルガと同一化される) と性交するという「見事な肛門空

想」(GWNb: 547)——から、鼠刑に関して彼が感じている快は肛門性愛的なものであると考えられる。「鼠刑は、とりわけ肛門性愛を目覚めさせた」(GW7: 432)。そうであれば、彼は刑罰の犠牲者に同一化し、肛門の中に鼠を迎え入れた際に犠牲者が感じるであろう、苦痛と入り混じったマゾヒズム的な快を表象していると考えられる。ここにおいて鼠は陰茎としての意味を帯びる(GW7: 433)。そこでは患者が幼少期に患った回虫、およびこの病気によって呼び覚まされた肛門リビドーの昂進が影響を及ぼしている。フロイトが覚書で述べるように、「鼠が寄生虫であるなら、それは陰茎でもあるのだ」(GWNb564)。

しかし他方で、鼠刑が父親とギーゼラに執行されるという懸念の裏には、彼と彼女にそれが執行されてしまえばよいという願望が抑圧を通じて隠蔽されており、そこには——特に父親に対する⁽⁴⁾——攻撃性が窺える。周知の通り、鼠男に対するフロイトの分析において主題となるのは妨害者としての父に対する鼠男のエディプス的な敵意であり(GW7: 405)、その限りで彼はむしろ刑罰の執行人に同一化して、憎むべき父が刑苦を与えられているのを想像しながら、サディズム的な快を覚えていると考えられる。鼠刑の話は幼年期に抑圧された父の権威との闘いを呼び覚まし、ギャンブルのために軍資金を横領するのも厭わない父というこの「賭け鼠〔賭博狂 Spielratte〕」(GW7: 430)へ刑罰が加えられる様を、鼠男は思い描くようになる。

さらに、犠牲者の肛門の中に食い入っていく鼠は鼠男自身を、とりわけ、不潔でよく他人に嘔みついていた子供時代の彼自身(GW7: 435)をも示す。したがって鼠刑の場面の中で彼は、刑罰の犠牲者や刑罰執行人のみならず、刑罰の道具であるところの鼠にも身を重ねていると考えられる。このように刑罰の道具となって犠牲者に苦痛と不安を与えるという空想は、ラカンによる倒錯の定式、すなわち倒錯者は「自らを《他者》の享楽の道具とする」(Lacan [1966: 823])を見事に表している。

以上のように、鼠刑の場面の中での鼠男自身の立場は曖昧でつねに揺れ動いており、Brunot [2005: 60] が言うように、

ここでフロイトが記述しているのは、サディズム的な極とマゾヒズム的な極との間の反転であり、それが能動性を受動性へと方向転換することによってもたらされていることがわかる。かくして、鼠のシナリオの内部で、エルンストは順々に、刑罰を科する者になったり、自分自身の肉体で刑罰を経験する者になったりしていると主張できるだろう。

私たちは鼠男の同一化の対象として「刑罰の道具としての鼠」を付け加えることができるが、こ

(4) 村井 [1994: 66] が指摘するように、ギーゼラに鼠刑が執行されるという話はいつの間にか後景に退いてしまい、父に対する処刑がもっぱらフロイトの解釈の中心となっている。

の交替運動を基礎として支えているのは、鼠（Ratte）というシニフィアンを結節点とする「言葉の架け橋〔Wortbrücke〕」（GW7: 433）である。鼠男は、ある時には鼠に肛門から侵入され、ある時には鼠である自分自身が肛門に侵入し、またある時には鼠に侵入されて苦しむ「大事な人」を見て愉しむ。

ここで鼠男の快に含まれるサディズム的成分をより詳細に分析すると、それは視覚の水準におけるサディズムであると言える。この刑罰における動作主の座は曖昧である。犠牲者の肛門に侵入して致命的な傷害を与える鼠は単に刑罰の道具に過ぎず、刑罰の中で鼠たちが何らかの快を覚えることはない。一方で刑罰執行人がサディズム的満足を得る可能性はあるが、執行人は単に刑罰の前提条件を整えるだけであり、直接手を下すわけではない。それゆえ刑罰が始まった後は犠牲者が鼠に苦しめられるのを傍観することしかできず、その立場は本質的に観客のそれと変わらないだろう。そうであればこの刑罰が生み出すサディズム的満足は鼠男が執行人＝観客の立場に身を重ねることで得られる、視覚的な満足であると形容できる。

実際、Brunot [2005: 59] が指摘するように、この鼠刑で争点となるのは「見たり見なかったりする可能性」である。ネメチェック大尉の口を通じて語られた鼠刑の刑罰は、鼠男にこの刑罰の「内面化された光景〔vision〕」（*ibid.*）を生み出した。Brunot [2005: 60] はまたこの鼠刑の空想的光景をフロイトの論文「子供が叩かれる」（1919年）と比較しているが、けだし正当であろう。分析の場で患者が——とりわけ女性の強迫神経症者が（GW12: 201）——しばしば語る「（不特定の）子供が（誰かに）叩かれている」という空想的で性的なイメージは、患者の傍観者ないし観客としての立場（「私はたぶんそれを〔傍から〕見えています」（GW12: 205））を含んでいる。そこには「大事な人が鼠刑で苦しむのを傍観する」という鼠男の視覚的サディズムと共通するものがあるのではないだろうか。実際、鼠男は鼠刑について、それは自分が執行するものではなく「非人称的に」（GW7: 392）行われると語っており、彼がこの刑罰に関して傍観者の位置に身を置いていることが分かる。

しかし、「子供が叩かれる」の空想は単に視覚的なサディズムの快を与えるだけではない。そこには、ジャン・ラブランシュが言うように「能動的定式と受動的定式との間での不確定性、あるいは相互変換性」（Laplanche [1970: 150/186]）がある。「子供が叩かれる」というこの空想は、（1）「お父さんが私の嫌いな子供を叩く」、（2）「お父さんが私を叩く」という二つの隠れた前段階を有している。この第一段階と第二段階の間には「重大な転換」（GW12: 204）が生じ、第一段階における嫌いな子供に対するサディズムが、それに対して生じる罪の意識によって、マゾヒズムへと転換される（GW12: 208-209）⁽⁵⁾。このマゾヒズム的な欲動満足の表象が抑圧されることによって（3）「子供が叩かれる」という歪曲を蒙った空想が生じるが、そこで叩かれている「子供」は、もはや第一段階におけるように単に他の子供ではない。それは第二段階におけるように自分自身でもあるのであり、そこにおいて〈見る〉私の視覚的能動性と〈見られる〉子供

の受動性との間の明確な区別は失われる。私は外から折檻を傍観するのみならず、中で折檻の対象になりもする。見ることが見られる対象との間に導入するであろう隔たりはもはや機能しくなくなり、〈対象を見ること〉がすぐさま〈見られる対象になること〉に転じる可能性が絶えず介在する。

同じことがまさに鼠男の鼠刑空想の中で生じている。刑罰執行人（それは今やこの刑罰の観客と区別できないが）に同一化して、父や恋人が鼠刑に処されるのを傍から見るや否や、彼は〈見られる対象〉である犠牲者の地位に貶められ、自分が刑罰の苦痛を蒙ることとなる。鼠男がその強迫観念の中で形成している視覚的なものは、このように、視覚的对象との隔たりを奪い取られ、それゆえ対象に対する優位性や支配性を有さないような視覚的なものである。

2. バタイユにおける視覚の転覆としての供犠

2-1. 内的経験における対象と視覚的なもの

その中で執行人と犠牲者とを、さらに観客とを隔てる差異が無化され、翻ってこの差異の侵犯それ自体によって聖なるものが出現するような供犠。それはまさにバタイユが生涯に亘って追究しつづけた光景ではないだろうか。供犠や刑罰へのバタイユのこの関心は、彼自身の分析と無関係ではない。アドリアン・ボレル（Adrien Borel）との分析の中で、分析家は患者に数葉の写真を手渡した⁽⁶⁾。それは中国の凌遲刑を写した写真であり、刑罰に処された罪人の陶然たる表情は、バタイユにとって供犠と恍惚＝脱自^{エクスターズ}の根本的な表象となった——奇しくも、そこで問題となっているのは、鼠男と同じく中国の刑罰である。

バタイユの供犠論は、〈内的経験における対象論〉という、より一般的な理論に立脚していると考えられる。しかし当然ながらそこで問題となる「対象」は、主体と対象との間の判明な区別や、認識対象に対する認識主体の優位性を前提とする通常の意味での対象ではない。それは「経験は最後に対象と主体との融合に達し、主体としては非-知に、対象としては未知なるものになる」（OC5: 21/33）という『内的経験』のあまりに有名な一節において論じられるような対象である。

この主体と対象との相関関係は、第二部「刑苦」および第四部第四章「恍惚」でさらに詳細に

（5） ただし Laplanche [1970: 151/188] は自身の欲動理論（片岡 [2021] で論じた）に基づいて、第一段階に見られるのはサディズムではなく、性欲動が導入される以前の自己保存本能に由来する攻撃性であり、それは第二段階において主体自身に向けなおされることによって初めて性的な意味を帯びると主張している。第三段階だけが本来の意味で性的なサディズムと称されうるが、性欲動が起源からもつマゾヒズム性ゆえに、それは純粹にサディズム的ではない——なぜならマゾヒズムはあらゆる性的な満足の源泉であり、サディズムに性的満足を与えるのは、マゾヒズム的満足を得る（と自らが想定する）犠牲者への同一化だからである。

（6） バタイユ本人が「この写真はフランスの最初期の分析家の一人であるボレル博士が私にくれたものだ」（OC10: 627/310-311）と明言している。

論じられることとなる。バタイユの対象論の基礎となる主張^{テーゼ}は、対象は内的経験において消え去ることにその意義が存するというものである。この定式は「刑苦」の中で、以下のように明晰な形で示される。

そしてとりわけ、もはや対象はない。恍惚とは愛ではない。愛とは所有であり、そこには対象が、主体を所有するとともに主体に所有される対象が必要だからだ。〔しかし内的経験がもたらす恍惚においては〕もはや主体＝対象はなく、両者の間の「口を開いた裂け目」〔だけ〕があり、そしてこの裂け目の中で主体と対象は溶解し、〔そこには〕移行が、交流があるのだが、それは一方から他方への移行や交流ではない。一方と他方は判明に^{ディスタンスクト}区別された現実存在を失ったからだ。(OC5: 74/134)

恍惚^{エクスターズ}の最中に主体と対象との判明な区別が失われ、主体が自己の孤立的実存から^{エクスタジエ}脱け出す以上、そこにあるのは、もはや「主体と対象との」交流とは言えないような交流である。しかし他方で、バタイユは対象というものの有する意義を軽んじてはいない。主体が^{エクスターズ}脱自に達するためには、そもそも自らに閉じこもった自己の外部に存する何らかの対象が必要である(OC5: 137/246-247)。そしてこのような外的対象に誘われることで可能となる脱自(恍惚)を、バタイユは「非-知の恍惚に先立つ運動」(OC5: 144/259)と位置付ける。

対象を前にした恍惚がまずもって(〈可能なもの〉として)与えられ、その後で私が対象を廃棄する[supprime]のであれば[……]、それゆえに私が不安の中に——恐怖の中に、非-知の夜の中に——入っていくのならば、恍惚はもう近くにあり、そして恍惚が生じる時、それは一切の想像可能なものよりも遠くにある深淵に私を突き落とすのだ。(ibid.)

ある種の対象は主体に恍惚を可能にするが、この恍惚は真の恍惚、非-知の恍惚の前提に過ぎない。恍惚が完全なものになるためには、この対象が主体によって廃棄されることが必要である。対象を前にした恍惚は、いわば非-知の恍惚という絶対的なものへの途上にある一契機(moment)に位置づけられ、廃棄され超克されること——supprimerがAufhebenの仏訳語の一つであることに留意されたい——にその存在意義を見出す。この論理は多分にヘーゲル的に見え、実際にバタイユが非-知と絶対知とを同一視している(OC5: 127/229)ことから、ここにヘーゲルの弁証法の論理が作用しているのは確かであろう。しかしながら恍惚における対象の廃棄は、企図(projet)の論理に従う主体の行動(action)——例えば、アレクサンドル・コジエヴが鍵概念として用いる「《否定行動》Action négatrice」——によってなされるものではない。

このことを理解するためには、同じ章でバタイユが用いている「点(point)」という用語に注

目する必要がある。〈点〉とはまさに恍惚の経験において廃棄されたものとして現れる対象の姿であり、「劇的な自己喪失の投影」(OC5: 137/247)によって主体が見出すイメージである。そしてまた重要なのは、この〈点〉の概念によって、経験に視覚的な形態が与えられるということだ。

点が消え去るとしても、点のうちから、点が経験に視覚的〔optique〕形態を与えたという事実が残る。精神が点を定立するや否や、精神はひとつの眼になる（精神は、行動の中で眼になっていたのと同様に、経験の中でも眼になるのだ）。(OC5: 138/248)

このバタイユの言述は曖昧であるように見える。ここでは「行動」と「(内的) 経験」が対置され、「経験」の中で〈点〉と化した対象を定立することで精神が「眼」になると主張されている。しかし同時に、精神は行動の中でも眼であったとも語られる。そうであれば、ここでは二種類の「眼(目玉 œil)」が区別されていると考えられるだろう。しかし、それらを区別する差異は何だろうか——〈見る〉眼と盲目の眼との間の差異でなければ。

恍惚の中で対象が〈点〉として揚棄されることで、主体には新たな視野が拓かれる。それは夜の暗闇そのものである視野であり、その中で主体の実存は眼の中に凝縮されるが、主体がそうである眼は、対象を見ようとしても、もはや暗闇の中で盲目同然となり、何も見ることができない。「そうして深い暗闇の中で見出されるのは、〈見ること〉の強烈な欲望であるが、この欲望を前にしてすべてが逃れ去る」(OC5: 144/260)。夜の最中で主体の眼前からはあらゆる対象が逃れ去り、暗闇だけが残る⁽⁷⁾。

この〔恍惚の〕対象は消え去り、夜がそこにある。不安が私を縛り付け、干上がらせるが、しかし対象と入れ替わったこの夜だけが私の期待に込めているのだろうか。突如として私はそれを知り、叫び声も上げずに謎を解く。私が期待していたのは何らかの対象ではなく、**この夜**だったのだと！ 私が対象を探し求めていなかったならば、私はそれを見いだすことはなかっただろう。(OC5: 144-145/260)

主体は対象を見る強烈な欲望を抱くが、夜の暗闇の中でこの欲望は挫折し、見るべき対象を見失う。しかしまさにそのことによって、主体は自分が求めていたものが対象ではなく夜そのものであったことを知る。それは判明に区別されたあらゆる対象をその中で溶解させるような夜であり、ひいては、主体をその中に呑み込み、主体と対象との区別すら廃棄してしまうような夜である。

(7) 横田 [2020: 216 sq.] はこのように定義されるバタイユの「夜」の概念に基づいて、『マダム・エドワルダ』(1941年)の中で主人公がエドワルダを夜の暗闇の中で追跡する場面を分析している。エドワルダはまさに闇夜の中で〈見る〉主体の視野から消失することによって未知なるものとなった「対象」である。

主体は対象を見る行動によってではなく、むしろその挫折によって真に見いだすべき対象を見ることができる。しかしそれはもはや主体そのものと区別されず、対象とは言えない何かであり、概念的規定が不可能なものである。ここにおいてこそ、対象は内的経験における真の地位を得る。つまり、上に引用したあの有名な一節ですでに示されていた「未知なるもの」としての対象である。

この夜において、私は、私という自己^{イブセ}と対立する「未知なるもの」と交流する。私は私自身にとっても未知なる自己^{イブセ}となり、〔自己と未知なるものという〕両者は一つの同じ四分五裂の中で混然一体となる〔……〕。(OC5: 145/261)

対象が夜の中に廃棄されることでそれは対象ならざる「未知なるもの」となり、同時に私自身の実存もこの夜の中で廃棄され、非-知となる。見ることの欲望への答えとして与えられるのは、何も見ることのできない暗闇であり、そこで眼はその機能を失って盲目となる——不能になった〈見ること〉には、対象からの隔たりが一切失われ、見られる対象と融合してしまう。夜そのものとなった対象とのこの融合こそ、内的経験の視覚的形態である。

2-2. 供犠における視覚の転覆

このように内的経験における対象と視覚的なものの機能を確認することで、私たちはバタイユにとって供犠がいかなる意義を有しているかを知ることができる。バタイユによれば「私たちは劇を通じてしか〈点〉という対象を投影することができない」(OC5: 139/250)。供犠とはまさにこのような意味での「劇」^{ドラム}であり、判明に区別された対象を〈点〉にするための舞台である。実際にバタイユは上の引用に続いて件の凌遅刑の写真が表象する惨事^{ドラム}について語っている。供犠とは劇であるというこの主張は、後年の『エロティシズム』(1957年)にも受け継がれる。

供犠とは一つの小説であり、血まみれの挿絵が加えられた御伽話^{コント}である。あるいはむしろそれは、基本的な状態として、一つの演劇^{テアトル}的表象であり、犠牲者となる動物や人間だけが演ずる、しかし死に至るまで演じつづける、そうした最終章^{クライマックス}へと切り詰められた劇^{ドラム}である。(OC10: 89/142)

供犠が小説であり、御伽話であり、劇であり、演劇であること——私たちは供犠を説明するこの語のリストに「見世物 spectacle」を付け加えることができるが、いずれにせよ、そこでは供犠というものがそもそも有する虚構的な要素が示唆されている。ただしバタイユは「虚構 fiction」よりも「ごまかし [subterfuge]」(OC12: 337/216) という言葉を用いており、「死の認識はごま

かしなしでは済ませることができない」(ibid.)と主張している。しかし、いかなる意味においてもそれはごまかしであるのか。

それは供犠の、否、内的経験そのもののもつある逆説的な困難に関わる。内的経験において主体が対象との融合に、あるいは同じことだが交流に至るとき、主体の意識は廃棄される。なぜなら意識とは世界に対する超越性であり、存在の連続性の中から一つの対象を判明に区別することにその本質が存しているからである。

〔供犠における〕内在的な内奥性への回帰は、意識が曇らせられることを必然的に含んでいる。意識は、直接的に把握されるそのものとしての対象に繋ぎ止められているからだ。すなわち、混乱した知覚の外部で、即融〔participation〕に基礎づけられた思考のつねに非現実的な諸イメージの彼方で把握される対象に、意識は繋ぎ止められているのである。(OC7: 308/57-58)

しかし重要なのは、供犠において意識は己が廃棄される様を意識的に見なければならぬということである。内的経験の逆説はまさにここに存する。この〈意識が廃棄されることについての意識〉は、とりわけ供犠が指し示す死のイメージにおいて際立たせられる。死において肉体と共に意識が消失する以上、人間は自分の死を意識によって見るができない。したがって、死を意識するためには、人は生きながらにして死ななければならぬ。

人間が最終的に自分に対して自分を啓示するために、人間は死ななければならぬだろうが、しかし人はそれを生きながら——自分が存在しなくなるのを視ながら〔en se regardant〕——行わなければならない。換言すれば、死が意識的存在を無化するその瞬間〔契機moment〕に、死自体が(自己)意識にならなければならないのだ。それはある意味で〔……〕ごまかしによって生じることである。(OC12: 336/214)

生きながら死ぬ、あるいは死にながら生きるというこの逆説を可能にするのが、まさに供犠という舞台装置である。供犠とは、供犠執行人が犠牲者に対して超越的な立場に位置しながら行う能動的な行為ではない。供犠において犠牲となる人間や動物が殺害されるとき、供犠執行人は死にゆく犠牲者と同一化する。つまり執行人は、相手を殺すことによって、翻って自分自身が殺され死にゆくを見ることになるのである。

供犠において、供犠執行人は死に襲われる動物と同一化する。かくして執行人は自分が死ぬのを見ながら〔en se voyant mourir〕死ぬのであり、いわば自分自身の意志を通じて、供犠の武器と心を共にしながら死ぬのだ。これは一種の喜劇⁽⁸⁾である！(ibid.)

供犠執行人は自分が殺す存在に身を重ね、あたかも自分が死ぬような感覚を覚える——もちろん、実際には供犠が終わっても執行人は生き続けるのだから、これは単なる「あたかも *comme si*」、つまり死の疑似経験でしかない。けれどバタイユが供犠を「ごまかし」と呼ぶ所以であろう。すなわち見ることの不可能な自分の死を、他者の死を見ることによってすり替えるという一種の詐術が、そこでは機能している。

しかしながらそれでも供犠は、視覚の新しい形態を私たちに呈示するという点において重要である。上の二つの引用は、バタイユが供犠における視覚の転覆を問題にしていることを明確に示している。供犠執行人が犠牲者を殺害する時、主体としての執行人が対象としての犠牲者に対して有する超越性や能動性は廃棄され、執行人は犠牲者を殺すことで、自分を殺害する。供犠を通じて、犠牲者は主体から隔てられたその対象性を失い、バタイユが言う意味での〈点〉となる。それによって、犠牲者が死ぬのを見ること (*voyer le victime mourir*) は、自分が死ぬのを見ること (*se voyer mourir*) へと反転し、〈見るもの〉としての視覚の能動性は無化され、〈見られるもの〉としての対象の受動的な位置へと転落する。

〈見るもの〉としての眼は、犠牲者の〈見られる〉眼と同化する——それは死によって盲目とされた目玉である。ここで私たちはバタイユの著作に通底する一貫性を見いだす。というのも、このような視覚の主体としての目玉の転覆という主題を、彼はその最初の小説から追究していたと考えられるからである。小説の中で作者自身が告白しているように、彼に憑きまとう目玉のイメージの重要な源泉は幼少時代に痛烈な外傷を残した父の盲いた白目にある (OC1: 607/133-134)。バタイユが一貫して問題としてきたのは、Holier [1974: 146/146] が言うように、「見られる目玉 [*l'œil vu*]」であって、見る目玉 [*l'œil qui voit*] ではない。つまり盲目の目玉である」。それを裏付けるように、小説の中で目玉は〈見る主体〉ではなく〈見られる対象〉の座に貶められ、抉り出されたり、掌に載せられたり、尻の割れ目に挟まれたりする運命を辿る。

そうであれば、『目玉の話』が描き出すこの目玉の対象化は言葉の本来の意味における供犠であると、事後的な形で主張することができる。事後的と言うのは、すなわち小説執筆の時点では供犠の議論がまだ完成をみていなかったからである。バタイユは内的経験や供犠に関する一連の概念化を通じて、自分に憑きまもっていた目玉の妄執オブセッションに理論的な形を与えようと試み続けたとすることができる。それは、自分を圧倒する強迫観念から逃げ出すのではなく、むしろ不安の只

(8) ここでバタイユが供犠を「喜劇」と形容していることから、供犠における「笑い」の問題が浮かびあがる。しかるに、細貝 [1994: 153] は、『内的経験』における「笑い」を巡る議論を参照しながら、供犠執行人と犠牲者とを「笑い手」、「笑われるべき人物」に対応させる。細貝によれば、供犠における笑いは、笑われるべき人物に対する笑い手の優越性をいささかも含んでおらず、それは供犠執行人＝笑い手が、笑われるべき人物＝供犠の犠牲者の地位へと転落する時に、「自分自身をもうひとりの自分が笑う「笑い」」(細貝 [1994: 154]) である。本文における私たちの議論は、この細貝の議論を視覚の観点から、特に視覚における能動的なものと受動的なものの観点から辿りなおしていると言える。

中で、それに正面から向き合い続けることを止めなかった主体の格闘の軌跡ではないだろうか。

3. 進むか、退くか——鼠男とバタイユの共通性と差異

視覚の反転ないしは転覆を通じて、供犠執行人は犠牲者と同一化させられる。しかるにそれは、鼠刑の場面の中で、あるいは「子供が叩かれる」という空想の中で生じているのと同様の事態であると言える。

私たちは鼠刑の空想の中で鼠男の傍観者としての位置を取り上げた。傍観者として鼠刑に居合わせるや否や、彼は眼前の光景に対する隔たりを奪い取られ、それを眺める自分自身が犠牲者の地位に転落する。この傍観者は、鼠刑が一つの見世物として行われる限りで観客スペクテイターと言うに等しいが、〈見るもの〉としての観客が〈見られるもの〉としての犠牲者へと転落することは、まさにバタイユの供犠の本質を成す事態である。

死の意識〔……〕は死に接近しなければ形成されないが、それは死が成し遂げられるや否や存在しなくなる。だからこそこの臨終は〔……〕多少なりとも生き残る人々という多数の観客がいることを〔……〕前提とするのだ。つまり供犠には犠牲者のみならず供犠執行人も必要なのである。(OC5: 114-115/207)

バタイユはここで、供犠にとっての観客の必要性を主張するが、次の瞬間には、それを供犠執行人の必要性と言い換えてしまう。このことから、彼が執行人と観客との区別を気にかけていないことがわかる。観客と執行人とは、両者ともそれが〈見るもの〉である限りにおいて、そして〈見るもの〉としての地位が転覆されて〈見られる〉犠牲者と同化されてしまう限りにおいて、供犠の中で同じ機能を果たすことになる。

しかるに、執行人と観客との間のこうした同一性はまた、私たちが鼠刑の中に見出したものに等しい。鼠刑の空想の中でも、この刑罰の執行人は事実上その傍観者に近い地位にあった。ただしそれは傍観者としての隔たりを失わざるをえない傍観者であり、自分が傍観する残酷な刑罰の中に置き入れられて、犠牲者の地位に貶められてしまうような傍観者であった。鼠刑の空想は〈見るもの〉と〈見られるもの〉との間の隔絶を許さず、〈見られるもの〉へと同一化することなくしては〈見ること〉を可能にしない。つまり父親や恋人に鼠刑が執行されるのをその空想的光景の中で見るや否や、鼠男は犠牲者そのものの位置に移動してしまい、この恐ろしい刑罰が自分自身に執行されるのをみることになってしまうのである——サディズムはマゾヒズムに、〈見ること〉は〈見られること〉に、能動性は受動性へとただちに変換され、鼠男という主体はその安定した地位を失わざるを得ない。ここで私たちは、鼠刑の光景がなぜ患者にとってかくも甚大な不安を引き起こしたのかを知ることができる。彼が耐え難いと思っているのはまさにこの主体の転

覆であり、自分から判明に区別された対象を超越的な位置から見ることができないというこの不可能性ではないだろうか。

そしてここにおいて同時に、鼠男とバタイユとの間の差異が際立って現れる。バタイユが供犠の光景における視覚の転覆へと、またそれが意識に与える不安へと、自ら進んで歩んでいこうとするのに対し、鼠男は、自分が思い浮かべる光景の残酷さを前にして怯んでしまう。彼は「大事な人が鼠刑に処される」という自分の空想の中に潜む無意識的な願望を受け入れず、それをあくまで「表象」として中性化し、^{ニュートラライズ}「しかし」「お前はいったい何を考えているんだ」と自分に言い聞かせて、この「表象」を追い払おうとする（GW7: 392）。その結果、彼は「立て替えられた鼻眼鏡の代金の不可能な返済」という別の問題へと逃げ込んでしまうのである。

鼠男が後ずさるところで、バタイユは先に進もうとする。私たちはそのようにして、同じような「視覚の転覆」の場面を形成したこの二人の主体の間の差異を示すことができる。転覆をもたらす供犠の場面への応答という点に関してバタイユと鼠男はいわば陽画と陰画^{ポジネガ}の関係にあり、一方の主体がそれを進んで受け入れることによって規定されるとすれば、他方の主体はそれを拒絶することによって規定される。そこにはフロイトが『性理論三篇』で示したあの有名な定式（GW5: 65）、すなわち「神経症は倒錯の陰画である」を見いだすことができるかもしれない。その場合、鼠男という神経症者に比して、バタイユの主体性を倒錯者として際立たせられるだろう⁽⁹⁾。

しかしこの差異を成立させているものは別の場所にも見出すことができる。それはすなわち、バタイユがボレルとの分析を経てこの供犠の思想に辿りついたのに対し、鼠男があくまで分析の途上にいる主体であるということである。鼠男は確かに鼠刑の空想から一度は逃げ出したが、しかし分析の中で、自分がかつて逃げ出した場所に改めて立ち戻り、この空想をフロイトの前で^{パロール}発話として口に出してみることができた。無論それだけで彼の強迫神経症への解決がもたらされるわけではないにせよ、少なくとも彼は、後ずさりをしてしながらも、自分の不安と向き合う覚悟を決めたのである。

そしてバタイユの仕事の全体は、こうした不安との対峙によって構成されている。その果てに彼が辿り着いた境地は、分析を終えた主体が何を手に入れるかを私たちに示唆してくれる。それは不安を歓喜（délíce）に変えること、不安を厄介払いするためではなく、むしろ不安が不安でありながらそれでもそれを一つの歓喜であるように、そしてこの不安の中で自分の存在意義が輝き出すように、不安へと深く沈潜することである。

（9） Holier [1974: 206/204] はまさにフロイトのこの定式を引用しながら、バタイユを倒錯者として位置づける議論を展開している。

「不安を^{アート}歓喜に転ずる技を教えよう」「輝かしいものにする技を」。それがこの本の全体の意味だ。私の中にある強烈さ、「不幸」というものはそのための条件に過ぎない。しかし歓喜に転じる不安はそれでもまだ不安である。それは歓喜でも希望でもなく不安であり、痛みを与え、もしかしたら〔私を〕解体してしまうかもしれない不安である。自分が単なる人間でしかないゆえに「死ぬ」、ということをしてしない者は、本当に単なる人間でしかないだろう。(OC5: 47/80-81)

結論——受動性から再帰性へ

鼠男の病理にとって視覚的なものは主要な地位を占めている。鼠刑の空想の中で彼は傍観者として視覚的なサディズムの快を覚えているように見えるが、同時に犠牲者にも同一化しており、それゆえ〈見るもの〉としての地位は〈見られるもの〉に転落せざるをえない。このような視覚の転覆は、対象を廃棄する（〈点〉化する）ことで廃棄された対象へ同一化するさまを描くバタイユの供犠の思想にも特徴的に見出せるものであり、そこではバタイユと鼠男の親近性が明らかになるが、同時にこの視覚の転覆を進んで受け入れるか、それを認めずに逃げ出そうとするかによって、両者の間には対照的な差異が生まれる。

しかるに、本稿で私たちはこの視覚の転覆を能動性から受動性への、あるいはサディズムからマゾヒズムへの転換として扱ったが、しかし供犠において執行人が犠牲者と即融することは、単に受動的なものへの転換と言えるだろうか。むしろ、より厳密には、それは中動的ないしは再帰的なものへの転換と言うべきではないだろうか。というのも、そこではもはや能動性と受動性の間の区分——それは主体と対象とを隔てる差異に並行する——を成立させている基盤それ自体が崩壊するからである。しかるにこうした中動性あるいは再帰性とは、ラプラランシュがマゾヒズムを、それも性的な満足の原型としてのマゾヒズム的満足をそれによって規定したものに他ならない。

ここでバタイユにおける再帰性としてのマゾヒズムという新たなる問題が明らかになる。バタイユが供犠の中で目指しているものを能動的サディズムと形容することが間違いであるならば、それを単に受動的なマゾヒズムと形容することも、同じくらい誤りを含んでいる。そこでは再帰的なないしは中動的としか形容できないマゾヒズムが機能しているのであり、いったいバタイユにおいてサディズムやマゾヒズムが何らかの価値をもつとすれば、その価値は能動性と受動性の二項対立を超えた彼岸にしか見出されないだろう。私たちには次の課題が与えられる。それはこのような、バタイユにおけるサドマゾヒズムの問題である。

引用文献

- ・外国語文献からの引用はすべて拙訳を用いたが、既訳があるものは以下に挙げる文献を参照した。
- ・バタイユの著作はすべて *Œuvres complètes de Georges Bataille*, tome I-XII (Paris : Éditions Gallimard, 1970-92) から引用し、OC の略号で巻数と頁数を本文中に記した。また各文献は『全集』掲載順ではなく初出順に配列した (未公開テキストは執筆開始年を基準とした)。
- ・フロイトからの引用は *Gesammelte Werke in 18 Bänden mit einem Nachtragsband* (Frankfurt am Main: Fischer Verlag) に典拠し、GW の略号で巻数と頁数を本文中に記した。
- ・特記のない限り引用文中の傍点は原文におけるイタリック体の箇所を示す。

- BATAILLE, Georges, « Dossier de l'œil pinéal » (1927-1930), dans *Œuvres complètes*, tome II, p. 11-47. (生田耕作 訳「「松毬の眼」関係草稿」、『ジョルジュ・バタイユ著作集 第一巻』東京：二見書房、1971年、187-282頁所収)
- *Histoire de l'œil (nouvelle édition)* (1928/1941), dans *Œuvres complètes*, tome I, 1970, p. 569-608. (中条省平訳「目玉の話」、『マダム・エドワルド／目玉の話』東京：光文社 (光文社古典新訳文庫)、2006年、35-140頁所収)
- « Matérialisme » (1929), dans *Œuvres complètes*, tome I, p. 179-180. (江澤健一郎訳「唯物論」、『ドキュマン』東京：河出書房新社 (河出文庫)、2014年、57-59頁所収)
- *L'expérience intérieure* (1943), dans *Œuvres complètes*, tome V, p. 7-234. (江澤健一郎訳「内的体験」、『内的体験——無神学大全』東京：河出書房新社 (河出文庫)、2022年、9-332頁所収)
- *Théorie de la religion* (1947), dans *Œuvres complètes*, tome VII, p. 281-361. (湯浅博雄訳「宗教の理論」東京：筑摩書房 (ちくま学芸文庫)、2002年)
- « Hegel, la mort et le sacrifice » (1955), dans *Œuvres complètes*, tome XII, p. 326-345. (酒井健訳「ヘーゲル、死と供犠」、酒井健編訳「純然たる幸福」東京：筑摩書房 (ちくま学芸文庫)、2009年、194-231頁所収)
- *L'Érotisme* (1957), dans *Œuvres complètes*, tome X, p. 7-270. (酒井健訳『エロティシズム』東京：筑摩書房 (ちくま学芸文庫)、2004年)
- *Les Larmes d'Eros* (1961), dans *Œuvres complètes*, tome X, p. 573-627. (森本和夫訳『エロスの涙』東京：筑摩書房 (ちくま学芸文庫)、2001年)
- BRETON, André, « Second Manifeste du Surréalisme », dans *La Révolution surréaliste*, n° 12, 1929, p. 1-17. (生田耕作 訳「超現実主義第二宣言」、『超現実主義宣言』東京：中央公論新社 (中公文庫)、1999年、77-176頁所収)
- BRUNOT, Chantal, *La névrose obsessionnelle : Histoire d'un concept*, Paris : Éditions L'Harmattan, 2005.
- FREUD, Sigmund, *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, in *Gesammelte Werke Band V*, S. 27-145. (渡邊俊之訳「性理論のための三篇」、『フロイト全集』第6巻、2009年、163-310頁)
- » Bemerkungen über einen Fall von Zwangsneurose « in *Gesammelte Werke Band VII*, S. 379-463. (福田覚訳「強迫神経症の一例についての見解」、『フロイト全集』第10巻、2008年、177-274頁所収)
- » Originalnotizen zu einem Fall von Zwangsneurose (» Rattenmann «) « in *Gesammelte Werke Nachtragsband*, S. 507-569. (総田純次・福田覚訳「強迫神経症の一例 (「鼠男」) のための原覚え書き」、『フロイト全集』第10巻、2008年、275-370頁所収)
- » » Ein Kind wird geschlagen «: Beitrag zur Kenntnis der Entstehung sexueller Perversionen « in *Gesammelte Werke Band XII*, S. 197-226. (三谷研爾訳「「子供がぶたれる」——性的倒錯の発生をめぐる知見への寄与」、『フロイト全集』第16巻、2010年、121-150頁所収)
- HOLLIER, Denis, *La prise de la Concorde : Essai sur Georges Bataille*, Paris : Éditions Gallimard, 1974. (岩野卓司・神田浩一・福島勲・丸山真幸・長井文・石川学・大西雅一郎訳『ジョルジュ・バタイユの反建築——コンコルド広場占拠』東京：水声社、2015年)
- LACAN, Jacques, « Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien », dans *Écrits*, Paris : Éditions du Seuil, 1966, p. 793-827.

LAPLANCHE, Jean, *Vie et mort en psychanalyse*, Paris : Presses Universitaires de France, 1970/2013. (十川幸司・堀川聡司・佐藤朋子訳『精神分析における生と死』東京：金剛出版、2018年)

— *Problématiques I : L'angoisse*, Paris : Presses Universitaires de France, 1980/2006.

SHENGOLD, Leonard, "More on rats and rat people", in *International Journal of Psycho-Analysis*, vol. 52, 1971, pp. 277-289. (馬場謙一監訳、児玉憲典訳「再びねずみおよびねずみ男について」、マーク・カンザー、ジュール・グレン編『「ねずみ男」の解説——フロイト症例を再考する』東京：金剛出版、2015年、63-93頁所収)

片岡一竹「マゾヒズムの誘惑——ジャン・ラプランシュと共に読むフロイト」、『表象・メディア研究』第11号、2021年、105-124頁所収。

細貝健司「「至高性」とはなにか——バタイユあるいは passage の笑い」、『藝文研究』第66号、1994年、145-160頁所収。

村井翔「フロイトと鼠男——フロイト再読 (8)」、『明治大学教養論集』通巻265号、1994年、63-88頁所収。

横田祐美子『脱ぎ去りの思考——バタイユにおける思考のエロティシズム』京都：人文書院、2020年。